



フィリップ・K・ディックの研
究本（他）
栗本 慎一郎
北泉社
(12/25刊・¥880)

ディックの短篇集と対になって出た、こちらには評論集。もともと「論」というほど本格的なものも少なく、エッセイ風の短文や、翻訳短篇（学生新聞に載った最近作）一篇を含めた、計二十七篇が並べられている。注目すべきなのは、これらの大半がSF外の書き手から寄せられたものである点。それだけ、ディックの評価は拡大しつつあるのだ。旧来の論点がSFプロバ作の「火星のタイムスリップ」等に集中していたのに、むしろ「ヴァリス」や、映画「ブレイドランナー」に関連した評価が多いのも目につく。この辺り、どう挿えるかは人によって違うだろうけれど、ディック的世界に、現在の日本が近付きつつある実態を反映したもの、ともいえる（不気味ですねえ）。何にせよ、（同社から刊行されている評論シリーズの一環として）椎名誠や村上春樹と同列にディックが置かれること自体で、ディックシンδροームを窺うこともできるはずだ。

ただし、小説側からの客観的な視点となると、SF界からの評論がやはり「公正」なものといえる（その分、本書の中では浮いてしまっているのだが）。